筑波学院大学紀要第１集　169～178ページ　2006年

＜研究ノート＞

中世常陸国の高野山信仰の一例
― 南野荘宍倉郷を中心に ―

千葉　隆司*

Believe in Koyasan of Medieval History Hitachi

Takashi CHIBA *

１　はじめに

人類には、迷い、苦しみ、不安などの精神的世界を信仰という形で解消しようとしてきた歴史がある。わが国の信仰は、縄文時代の土偶という偶像崇拝や山や海などに対する精霊信仰などに起源が求められるが、この信仰文化は時代とともに変化してきた。

中世戦国期においては、国内全体で戦乱が起こり、各国武将はもとより農民層まで戦乱に借り出され、生死をさまようことが日常茶飯事となっていた。日々の生活に精神的ダメージが、計り知れないほど存在したことは想像に難くない。そして、その不安を信仰によって拭い去ろうとする動きが各地でみられていた。常陸国南野荘宍倉郷（かすみがうら市宍倉）には宍倉城があり、常陸南部に勢力を持っていた小田氏重臣である菅谷氏が城主であった。菅谷氏も小田氏とともに行動することが多く、戦国期の各種資料にその名がみられる。宍倉では、戦国期において高野山信仰が行われていた。その様子は、「高野山日月牌過去帳」によってある程度判明し、いつ誰が、どんな内容で行っていたか現在の私たちに教えてくれる。

また、かすみがうら市安食の寿栄山千手院福蔵寺には、僧侶をかたちどった彩色豊かな仏像がある。この仏像は、右側に首をかしげ、目元がややほころんでいるユニークな表情を示している。平成10年に、この仏像を詳細にみる機会があり、胎内に銘文が残されていることを確認した。その銘文には、この仏像のモデルとなった僧侶名と檀那となっていた当地域を支配する宍倉城主名などが記されており、資料が少ない中世末である戦国期の貴重な資料であることが判明した。この住職と城主の２人は、前述の高野山日月牌過去帳にもみられる人物であり、仏像胎内銘文も高野山信仰との関連を示す内容と考えられる。本論では、この南野荘宍倉郷そして、宍倉城下を地域信仰単位の一つとして捉え、戦国期の高野山信仰の一例として紹介し、若干の考察を加えてみることとする。

＊　かすみがうら市郷土資料館、Hometown Museum of Kasumigaura City

２　常陸国南野荘宍倉郷と宍倉城について

常陸国南野荘は、古代南野牧が荘園化したところである。南野牧の範囲を記した康治２年（1143）８月19日の太政官牒案（安楽寿院古文書）によると、「南野牧　東限海　西限筑波山　南限筑波河　北限荒張河」とあり、東は霞ヶ浦、西は筑波山、南は桜川、北は天の川で括られた範囲ということが分かる[1)]。その中で宍倉郷は、現在のかすみがうら市宍倉周辺が比定されている（図１）。ここに領主が存在しはじめたのは、永享年間（1429～41）の頃に居した野田遠江守が最初とされ、永享七年（1435）に鹿島神宮の修理費用を徴収するための基礎台帳として制作された「常陸国富有人等注文」にも宍倉郷の知行人として「野田遠江守」の名称がみられることからも裏付けられる。その後「関八州古戦録」に「常州宍倉城主菅谷隠岐守」とみられ、宍倉郷荻平（かすみがうら市宍倉荻平）の観音像台座には文亀年間（1501～04）の菅谷隠岐守貞次の銘があったとされることから、16世紀には菅谷氏が領主となっていたことが分かる。永禄７年（1564）頃に制作された「小田氏治味方地利覚書」にも「志々くら（宍倉）すけのやむまのてう（菅谷右馬允）」とあり、当時も小田重臣として認識されていた。小田遺聞集２によると菅谷氏は、「延元二年（1337）丁丑八月二十三日に小田治久の重臣である土浦城主信太庄司宗房が茨城郡菅谷原（現土浦市菅谷）で急に硯が必要になったとき、通りかかった旅の僧が笈から硯を出し、また桔梗の露を集めて硯の水とした。その機転を信太氏が感心し、還俗して菅谷氏となっ

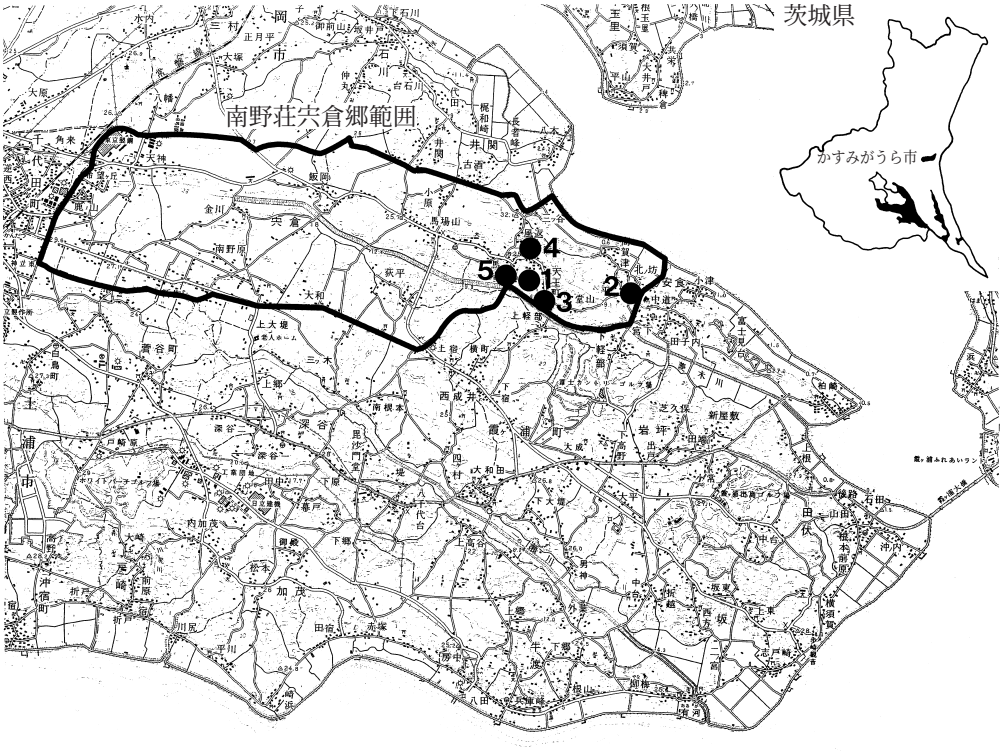

図１　南野荘宍倉郷の位置（１宍倉城　２福蔵寺　３空也堂　４最勝寺　５果泰寺）

たとされ、菅谷という地名を名称として、桔梗を家紋とした」とされる。この内容に登場する旅の僧は、禅鉄という勧進聖で村上天皇の後胤赤松但馬守家定二男の赤松次郎太夫則継とされる。則継は、父である家定の勘気を蒙って出家し禅鉄と号したという。一説にはこの禅鉄は高野聖であったとされる。「高野山日月牌過去帳」には、天正２年に亡くなった菅谷源左衛門の戒名が全徹とあり、何か関連を窺わせるが、時代的に合わない。禅鉄は、菅谷紀伊守治範と名乗り、その嫡子は伯耆守範定といったとされる。範定は、後に小田八代孝朝の孝の一字を賜って孝定になったという。その後の系譜は不明な点が多い。

宍倉城は、現在でも良好な遺存状況でかすみがうら市宍倉に残り、市指定文化財（史跡）となっている。小字名も「本丸・館下・大手・搦・番城・城戸入」とあり、当時の様子を復元する有効な資料となっている。城の範囲は、菱木川とその支流に挟まれた狭長な台地に位置し、東西約４ kmを縄張りとしている。台地上は、堀や土塁で区切られ、本丸とされる周辺には、最勝寺（浄土宗）・杲泰寺（曹洞宗）・長命寺（真言宗）・福蔵寺（真言宗）・空也堂などを配している。松翁山瑞雲院最勝寺は、永禄２年（1599）願慶上人の開山と伝えられる。宍倉城主菅谷氏が、寺領二石五斗を寄進して母堂の霊牌所としたとされている。陽広山杲泰寺は、文亀３年（1503）に宍倉城主菅谷氏が、下野国大中寺の桂庵和尚を向かえ、開山したとされる。境内には菅谷氏の墓と伝えられる墓石が残されている。平杉山金剛院長命寺は、応永元年（1394）に乗心法印によって宍倉城主の祈祷所として開山されたと伝えられる。現在廃寺となっている。福蔵寺と空也堂に関しては別記してあるので省略する。現在本丸という小字の場所が主郭とされているが、これより西側の箇所に櫓台を備えた土塁がある場所があり、さらにその西側が小字「大手」、東側が小字「搦手」となることから、ここにも主郭があった可能性が高い。時期によって主郭が移動したのであろう。宍倉城は、南北が河川を利用した自然要害となるため、東西方向に防御施設を造る必要があった。宍倉字横堀に残る堀は、まさに西からの侵入者を阻む最前線の防御施設といえるものである。そして、さらなる防御施設として宗教施設を巧みに利用したのである。そのような宍倉城も天正元年には常陸国統一を目指す佐竹義重によって攻略された。その後慶長７年（1602）の佐竹氏秋田国替えによって廃城されたという。しかし平成12年度に実施した周辺の遺跡分布調査では、17世紀前半代の遺物も数多く採集されていることから、すぐに廃城されたのではなく、陣屋等の形である程度存続していたと考えられる。

３　高野山日月牌過去帳について

高野山は、荘園が不知行化していく状況に対応するように、諸国領主等と契約し、参詣の際には宿坊を利用させ、新たな財源確保を目指そうとする動きを見せてくるようになる。高野山の各院家に属する僧侶は、その特定領域に下向しては、有力領主を中心とする一族・家中の人々の死者供養を行い、さらに高野山での戒名供養を依頼されたのである。高野山清浄心院は、天長年間（824～833）高祖弘法大師の草創にかかり、初めは北坊と称したが、後に勅号を賜り清浄心院となった。清浄心院は、佐竹氏や常陸中南部の大掾氏・土岐氏・岡見氏・菅谷氏などの領主と関係を結び、自分の領内の一族や家臣、民衆等の参詣に際しては、契約した宿坊に宿泊するように命じた。その参詣あるいは供養依頼の様子は、清浄心院に残る「常陸国日月牌過去帳」によって具体的に知ることができ、前述した常陸国中南部の領主とその一族及び家臣等の名が登場してくる。

宍倉関係者をみてみると永禄11年（1568）

から慶長７年（1602）までの期間に総数49名がみられる。依頼者をみてみると宍倉城主菅谷隠岐守やその一族がはじめみられるが、慶長年間には菅谷氏と代わり、大和田伊賀守や大山田刑部などの人物がみられ、宍倉支配者の流れも窺いしれる。供養の種類も霊位26と逆修22、不明１とほぼ同数がみられ、そこに月牌36・日牌７・茶牌１・不明３などの供養回数の差が生じている。月牌が一般的であるが、茶牌が１つ存在することも注目すべきことであろう。茶牌は、一時的な供養を行ったもので、高野山清浄心院に残された常陸日月牌過去帳１冊37帖の中に、僅か４件しか存在しないもので貴重なものといえる。しかもそのうち３件が宍倉・南野荘戸崎の菅谷氏関係のものである。また、男女そして僧侶の比率をみると男20（内３は僧侶の可能性あり）・女22・僧侶７と、意外と女性が多いことも注目すべきことであろう。依頼者の中には、寺院あるいは僧侶と思われる人々の動きもみられ、福蔵寺（かすみがうら市安食）、東林坊（不明）、宝蔵院（かすみがうら市宍倉の法蔵院か？現在廃寺）、風呂坊（不明）、宝泉坊（不明）、十輪坊（不明）、智因坊（不明）などがみられる。これらには「取次」と記されたものもあり、依頼主から中継を受ける立場であり、真言系寺院あるいは高野聖との接触が予測できる人物と考えられる。供養された時期をみてみると年月日ともに同じ場合が数例（天正８年５月17日、天正12年３月21日、天正13年３月４日、天正19年２月23日、文禄２年12月８日）あり、また年月日が近接する場合（天正６年３月24・26日、天正12年３月21・24日、天正14年４月15・17日、天正19年２月23・24日、慶長６年10月６・９日）があり、それぞれ各自で高野山に登ったと考えるより、高野聖を介してまとめて供養を依頼したと考えたほうが自然と思われる。

４　寿栄山千手院福蔵寺について

寿栄山千手院福蔵寺は、かすみがうら市安食字北ノ坊に所在する真言宗寺院である。現在は、石岡市井関の盛賢寺（真言宗）の管理下にあり、北側に小堂、道路で分断された南側には墓地が広がる。貞享３年（1686）水戸領内寺院整理の際に作成された「開基帳（真言宗）」によると長禄２年（1458）に俊弁法印開基、宍倉城主の祈祷所と記されている。熊野権現を併設し、門徒寺院18か寺、百姓檀那が305人とされ、近隣では比較的大きな寺院であったことが窺える。

堂内には３体の仏像が安置されている。本尊の木造千手観音菩薩坐像は、鎌倉時代後半から末期の作で、像高78.5cmを計る。檜材寄木造・玉眼。熊野神社を併設していたことを考えると熊野信仰との関連から、熊野那智宮の本地仏として安置されたとも考えられる。木造地蔵菩薩立像は、室町時代後半から末期の作で、像高94.2cmを計る。寄木造・玉眼。像高50cmを計る。木造俊円和尚坐像は、木造一木造・彫眼（写真１）。胎内には18行からなる以下の銘文が墨書されている。「此形僧俊圓祖也　彼之香花茶湯　之為二成井宿而復二田二タン　俊圓二旦那　右馬丞殿　侘事申　カイ福蔵寺　常住弟子共　五百也フタン渡候　又五百也□俊圓　正月忌日二理趣　三昧一座衆中　□□成者成　以上二タン寺□之外俊圓　私付物也　元亀三年八月一日」とある。文章的には意味不明な箇所も存在するが、大約すると、「この像は俊円の像で、俊円の供養（逆修）のために成井宿の田２反をあてた。俊円の旦那には右馬丞殿がいる云々…」ということであろう。

ここに登場する俊円そして右馬丞が、次に紹介する過去帳に名を連ね、高野山信仰とのつながりを示している。

写真１－①

写真１－②

写真１－③

写真１－④

写真１　木造俊円和尚坐像（福蔵寺）

5　戦国期の宍倉と高野山信仰

では「高野山日月牌過去帳」に記された年号順に合わせ、宍倉郷がどのような歴史と信仰状況であったのかみていきたいと思う。文頭の数字は、高野山日月牌過去帳一覧表の番号と対応する（表１）。１は、宍倉城主菅谷右馬丞が依頼者となり、永禄11年に男子を供養している。日牌という永代供養方式から身内、想像をたくましくすると息子とも考えられる。翌年にも右馬丞が男性とみられる月牌供養を行っている。さらに右馬丞は、高野山

表１　高野山日月牌過去帳にみられる南野荘宍倉郷の様子

	依頼者・目的	戒名	年号	供養の種類	性別	西暦
1	常州完倉菅谷右馬丞立之	恵清童子	永禄11年３月16日	日牌・霊位	男	1568
2	常州完□菅谷右馬丞立之	増子	永禄12年６月14日立之	月牌・霊位	男	1569
3	常州完倉下河辺大炊頭娘	宗語禅定尼	永禄12年８月13日立之	日牌・霊位	女	1569
4	常州完倉福蔵寺六十九	権大僧都俊円	永禄13年２月24日	月牌・逆修	僧	1570
5	常州完倉三橋丹後守タメニ立之	秀阿弥	元亀３年４月17日		男	1572
6	常－完倉御東逆修	華獄妙栄禅定尼	元亀４年正□７日	日牌・霊位	女	1573
7	常州完倉菅谷源左衛門	通□全徹	天正２年８月７日東立之	日牌・霊位	男	1574
8	常州完倉為家中立之	本室妙源禅定尼	天正２年10月24日	日牌・霊位	女	1574
9	常州完倉　東林坊立之	権大僧都栄範	天正２年２月朔日	月牌・霊位	僧	1574
10	常州完倉為土屋源次立之	聖光禅定門	天正３年２月26日	月牌・霊位	男	1575
11	常州完倉井門三郎左衛門立之	窓雪禅定門	天正４年	月牌・霊位	男	1576
12	常州完倉館内為子立之	妙賀禅定尼	天正４年	月牌・逆修	女	1576
13	常州完倉□蔵寺	法印権大僧都俊円	天正６年	日牌・逆修	僧	1578
14	常州完倉東林坊立之	権大僧都俊善	天正６年３月24日	月牌・逆修	僧	1578
15	常州完倉東林坊立之	権大僧都俊善	天正６年３月24日	月牌・逆修	僧	1578
16	常州完倉宝蔵院	権大僧都俊済	天正６年３月26日	月牌・逆修	僧	1578
17	常州完倉飯村家中立之	妙慶禅定尼	天正８年３月29日取次智因坊	月牌・逆修	女	1580
18	常州完倉二平内記家中為菩提	妙玉禅定尼	天正８年５月17日　立之	月牌・霊位	女	1580
19	常州完倉取次東林坊	妙蓮禅定尼	天正８年５月17日　立之	月牌・逆修	女	1580
20	常州完倉飯村家中立之	春宗禅定門	天正９年３月26日	月牌・霊位	男	1581
21	常州完倉ナカツカ肥後守立之	道椿禅定門	天正12年３月21日	月牌・逆修	男	1584
22	常州完倉為家中同肥後守立之	妙孝禅定尼	天正12年３月21日	月牌・逆修	女	1584
23	常州完倉為老母田村備前守立之	妙悦禅定尼	天正12年３月24日	月牌・霊位	女	1584
24	常州完倉為与五郎松延大炊助	盛喜禅定門	天正12年８月５日	月牌・霊位	男	1584
25	常州完倉ヲチノ為ニ閑居立之	妙芳禅定尼	天正12年10月１日	月牌・逆修	女	1584
26	常州完倉為老母羽生藤八郎立之	妙春禅定尼	天正12年12月17日	月牌・霊位	女	1584
27	常州完倉およゝ立之	妙季禅定尼	天正13年３月４日	月牌・逆修	女	1585
28	常州完倉菅谷右馬亮立之	雄山存英居	天正13年３月４日	日牌・逆修	男	1585
29	常州完倉飯村為息女立之	妙慶禅定尼	天正13年12月24日	月牌・霊位	女	1585
30	常州完倉風呂坊主	金砂居士	天正14年４月15日	月牌・逆修	男	1586
31	常州完倉宝泉坊立之	権大僧都玄深	天正14年４月17日	月牌・逆修	僧	1586
32	常州完倉野口淡路守為家中	妙泉禅定尼	天正16年１月11日立之	月牌・霊位	女	1588
33	常州完倉為松延信濃守	道清禅定門	天正16年６月28日立之	日牌・霊位	男	1588
34	常州シゝ倉テカノ門松斎立之	道鑿禅定門	天正19年２月23日	月牌・逆修	男	1591
35	常州完倉為子門松斎立之	慶祝禅定尼	天正19年２月23日	霊位	女	1591
36	常州完倉ヲチ立之	宗慧禅定尼	天正19年２月24日	月牌・逆修	女	1591
37	常州完倉四郎兵衛家中自身立之	帰空妙国禅定尼	文禄２年12月８日	月牌・逆修	女	1593
38	常州完倉田村備前守子息タメニ立之	道頓禅定門	文禄２年12月８日	月牌・霊位	男	1593
39	常州南庄完倉野口淡路守為ムスメノ	花渓妙春禅定尼	文禄３年３月３日　立之	月牌・霊位	女	1594
40	常州完倉高村与左衛門内方立之	宮太郎	文禄４年８月２日	月牌・霊位	男	1595
41	常州小田完倉十輪坊為旦那立之	大和田伊賀守	慶長２年５月13日	茶牌・逆修	男	1597
42	常州シゝクラ高村河内守為息女立之	宗幻禅定尼	慶長３年３月11日	月牌・霊位	女	1598
43	常州シゝクラ大和田伊賀守為内方立之	妙珎禅定尼	慶長３年６月29日	月牌・逆修	女	1598
44	常州シゝクラ大和田イカ為自身立之	生閑禅定門	慶長３年７月日	逆修	男	1598
45	同施主（常州シゝクラ高村河内守）為父立之	道悦禅定門	慶長４年２月17日	月牌・霊位	男	1599
46	常州シシクラ大山田刑部大輔殿為老母　立之	繁室妙昌大姉	慶長６年10月６日	月牌・霊位	女	1601
47	常州シシクラニテ大山田刑部大輔殿	独峯全雄禅定門	慶長６年10月９日　立之	月牌・霊位	男	1601
48	常州完倉モゝノ大山田刑部太輔為家中	昌春大姉	慶長６年12月21日　立之	月牌・逆修	女	1601
49	常州完倉	見音房	慶長７年６月11日	月牌・霊位	男	1602

清浄心院末になる長楽寺[2)]（つくば市手子生）の取り次ぎで、永禄12年12月23日に「祖印芳意禅定門」の霊位月牌供養を行っている。この永禄12年は佐竹義重の小田氏治攻めで著名な手這坂の合戦があった年である。ここでシシクラ兵部少輔という人物が戦死しており、前記の右馬丞が該当する可能性が高い。永禄11・12年と連続して、そして自らが戦死する手這坂の合戦の前日の12月23日まで高野山への供養依頼を行う右馬丞は、熱心な高野山信仰者か高野山との密接な関係がある人物と思われる。４は、福蔵寺六十九が権大僧都俊円を月牌逆修供養している。この福蔵寺に関しては、前記のとおりである。福蔵寺に残される俊円像の胎内銘文には、五百という数字が２回登場するが、この数字に関連するかどうか少々疑問であるが、日月牌過去帳には興味深い記載がある。「常州府中御ツホ子□いノタメニ五百文　妙香禅尼　逆修　天正六年四月日」がそれであるが、五百文という銭が、逆修供養に関わる行為に支払われていることが分かる。俊円像の銘文も読み方次第では「弟子共が五百文の負担をして、三昧一座（高野聖）に正月忌日に俊円の供養を依頼した」とも解読でき、拡大解釈をすれば４の福蔵寺六十九は69人の弟子が、俊円のために供養をお願いしたとも読み取れる。時期的にも、供養が永禄13年（1570）で、俊円像の銘文が元亀３年（1572）ということからも、胎内銘文の内容が２年前に行った供養を明記した可能性は高い。５は三橋丹後守のために供養され、戒名が秀阿弥とある。三橋丹後守は、出家して阿弥号を号し念仏聖となったのであろうか。供養の形態は、宍倉記事の中で唯一不明となっている。６の御東は菅谷氏一族と思われ、女性（近親者と考えられる）を日牌供養しており、３年後の天正２年にも菅谷源左衛門を日牌供養している。ここでの源左衛門は、手這坂の合戦で戦死した城主の後継者と思われる。天正２年の家中（妻）が日牌供養した本室妙源禅定尼は、宍倉最勝寺（浄土宗）の過去帳にも同じ戒名で登場し、天正２年10月24日という同日において最勝寺殿松誉本室妙源大禅定尼で位牌が存在している。この位牌は、四世孫主税守が古城主菅谷隠岐守母儀成として製作している。天正元年７月には、宍倉城が佐竹義重によって攻撃されており、戦国期の日記に代表される姻田旧記によると「元亀四癸トリ七大廿一義重様御出陣故、同廿五ししくらへ押詰、八木せうにんとられ御同心」とあり、また佐竹氏系譜には「天正元年義重兵を発して小田氏治をせめ、その領知常陸国宍倉戸崎の両城を切とり、其余の郷村を焼て太田に帰る」とある。さらに秋田藩家蔵文書の佐竹義重書状写には「戸崎・宍倉両地速二属手、證人等取之、其外残所之郷村悉成墟」とある。天正２年に日牌供養された菅谷源左衛門は、前年の佐竹義重に宍倉城が攻撃された時の城主と考えられる人物で、供養した月日が攻撃の時期とほぼ重なることから、攻撃を受けた際に自害あるいは殺害され、その一周忌に供養されたものと考えられる。この源左衛門は、戒名を通□全徹といい、他の戒名と比較して宗教関係者を窺わせるものとなっている。ゼンテツという名称は、前述したように菅谷氏高野聖伝承に登場してくる「禅鉄」という高野聖の名称と同様であり、何か関連を窺わせる。12は宍倉館内の子（女子）が逆修供養されている。この女子の戒名「妙賀禅定尼」は、宍倉最勝寺の過去帳にある天正17年６月20日に亡くなった菅谷隠岐守息女の戒名「慶誉妙賀大法尼[3)]」と類似しており、同一人物の可能性が高い。宍倉城は、前述のとおり天正元年に佐竹義重によって攻略されており、宍倉村も廃墟になったとされるが、この天正４年の館内の子の供養が実施されていることを考えると、まだ宍倉城は菅谷一族関与できる状況であったと思われる。13は、４と同様に福蔵寺が住職俊円の逆修供養を行っている内容であ

る。俊円は、逆修２回を実施したがこれ以降名前は認められず、死後供養されたかどうか分からない。28は、宍倉城主菅谷右馬亮が日牌逆修供養を行っており、天正13年以降菅谷氏の名前もみられなくなる。いよいよ宍倉城明け渡す時期となったのであろう。ここで右馬亮が供養している人物の戒名は、「雄山存英居」で土浦城主であった菅谷範政の法名「雄山良英大居士」と類似しており、右馬亮が菅谷範政を逆修供養している可能性が高い。また、天正６年には右馬允が下妻城主多賀谷修理亮重政の霊位日牌供養を実施している。この時期の右馬允は、天正元年に佐竹義重に攻撃を受け、翌年に霊位供養された菅谷源左衛門の後継者として多賀谷氏から養子を受けた人物と指摘されており[4)]、実家の供養を実施する点もうなずける。永禄11・12年、天正６・13年と宍倉城主という立場から、家系は様々であっても近親者のみならず、他地域（土浦城主や下妻城主など）の高野山供養を継続する宍倉菅谷氏は、その厚い崇拝と密接な関係を窺わせている。天正年間に入ると、飯村・ナカツカ・田村・羽生・野口などの宍倉菅谷氏家臣団と思われる人物による供養が多くみられるようになる。戦乱が高まる時期でもあるため、人物の移動も顕著になってくる様子を反映したものであろう。24・33の松延氏は、元田土部城主（新治村田土部）であった。松延氏家系譜によると天正18年に佐竹義宣の攻撃を逃れるために、宍倉菅谷氏を頼ったとされ以後土着したとされる[5)]。しかし、天正12年に与五郎の月牌霊位供養した松延大炊助、天正16年に日牌霊位供養された松延信濃守など、天正18年より以前に宍倉に在住した可能性も考えられる。43・44の大和田伊賀守は、佐竹義重に従った千葉氏一族の武将である。慶長年間には宍倉の地に配されたようで、ここに名前が登場している。かすみがうら市大和田に残る大和田城跡が拠点であろうか。46・47・48に登場する大山田刑部大輔は、佐竹氏家臣とされ文禄４年に宍倉城に移り城主となった。

このように宍倉城下では、城主自身の慣習として高野山信仰が行われ、支配者が変わってからもその信仰は継続されていたことが分かる。

６　その後の宍倉での高野山信仰

慶長７年（1602）で『高野山日月牌過去帳』にみられる宍倉での高野山信仰の記録は最後となる。これ以後、高野山信仰はどのような結末を向かえたのであろうか。宍倉では、回国と納骨を行う高野山信仰と類似する宗教者に空也聖がいた。福蔵寺と宍倉城跡の間の地に空也堂と関連史跡がある。この空也堂の古記録をみるに宍倉城主菅谷隠岐守の手厚い保護を受けた歴史があり、中世戦国期には存在していたことが窺える。また、空也堂の前に安置される五輪塔などの石造物も中世に遡るものである。

高野聖が、室町時代以降時宗化が進行したことは各種資料から知られる。その起源は、高野聖の三大集団に数えられる千手院聖に求められ、千手院谷に居する時宗聖集団が元になっていた。千手院谷の時宗化に端を発し、周辺に拠点をもつ高野聖はすべて時宗化していったという。当然、常陸国と宿坊関係をもっていた清浄心院も時宗化したことであろう。千手院谷の千手院は、名前からも判断できるように千手観音を本尊としていた。そして、千手院の境内には時宗の鎮守とされた熊野社が祭られていた。前述した高野山信仰に厚かった俊円住職がいた福蔵寺も本尊を千手観音とし、熊野社を併設する寺院であった。

さらに、時宗化した高野聖は、六字称名を鉦鼓を鳴らして唱えていたとされ、賦算による勧進を行っていた。これは宍倉村の空也堂にみられるものと一致する[6)]。また、高野山において清浄心院と対面に位置する蓮花谷聖

は、回国と納骨が特色とされ、「紀伊続風土記」には諸国の路地にある遺骨を拾う姿が記されており、当時の高野山聖活動の一端を物語っている。宍倉村の空也聖資料にも行き倒れになった人々の供養が以前の活動内容であったことが記されており[7)]、蓮花谷聖同様に、三昧聖的な活動もみえてくる。

以上をみてくると戦国期の高野聖と近世空也聖は、重なり合うところが数多く存在している。宍倉が空也聖系念仏聖集団の拠点に発展した基盤は、活発な活動をした高野聖と菅谷氏の存在に求められるのではないだろうか。

そもそも宍倉城を拠点とした菅谷氏は、高野聖が還俗した武将との伝承がある人物である。天正年間に周辺武将の供養依頼を実施したり、代々高野山への近親者供養、家臣や城下の人々の積極的な高野山への供養は、まさに高野聖を祖にする菅谷氏ならではの行為とも考えられる。その普及拠点ともなった福蔵寺は長禄２年（1458）に俊弁法印開基とされるが、この時期に菅谷氏も宍倉入りしたと考えられる。想像をたくましくすれば、菅谷氏と行動を共にした高野聖俊弁を城下東端に配置して福蔵寺を開山させ、高野山信仰の拠点としたとも考えられよう。そして、後に時宗化した高野聖も宍倉城下に現れるようになり、良き信仰者であった菅谷氏が宍倉から離れていくころには、高野山との関係も薄くなり、土着化したものと思われる。そして、近世に入ると宗教改革とともに、時宗としての意識を強めざるを得なくなり、いつしか弘法大師ではなく空也を祖にした空也聖が誕生していったのではなかろうか。その空也聖も、水戸藩の宗教改革の波に追いやられ、宗教者としての立場さえ取り上げられる時期もあった。しかしながら、その宗教者としての精神は、代々引き継がれ、現在にまで資料を残している。

7　おわりに

宍倉の地は、高野山信仰の拠点ともなったこと、そして支配者であった菅谷氏は、高野山と密接に関係する人物であったことを本稿では考察した。そして、高野山信仰の行く末として、空也信仰に変化した可能性も問題提起として取り上げた。当時の人々は、俗界での心安らげない状況に対し、せめて死後の世界では安泰な生活を望みたいと願っていたに違いない。宍倉城主菅谷氏は、そんな心情から日本菩提所とされる高野山に継続的な信仰を抱いていたのである。

ある新聞社の宗教に対する全国世論調査によると、宗教を信じている人は２割程度に収まるのに対し、約８割の人が神社や寺などに行っているといった一見矛盾しているようにもみえる、日本人特有の意識・行動が示された。また葬式は無宗教でと望む人は40％に達し、宗教的儀式の必要性が薄れている状況が窺えた。戦国時代の宗教観をみてみると、殺人者ではあるものの、死後の世界の安泰を切実に願う姿が、各種宗教遺物から窺え、生活に信仰という精神文化が密着していた様子が分かる。神仏にすがることで、肉体的・精神的な問題が解決すると切に信じていたのである。宗教を辞書で引いてみると「安心・なぐさめ・幸福を得ようとして、神・仏などを信仰すること」とある。古来この宗教によって賄われていた人類の弱い精神面の手助けは、現代となって、信仰心の薄れから求められなくなっていった。不安定な精神は、行き場を失い、自己の内に潜められることが多くなり、ストレス社会をつくりだしていく。人々は、現実的に存在し、具体化された物へ依存度を増していき、眼に見えない非科学的なものは遠ざけていく傾向に進んでいる。ここには、心無い人間像を形成する要因が潜んでおり、社会における様々なマイナス面は精神文化が疲弊した現代人類にその因果関係がある

といっても過言ではない。精神文化の育成は、人類に思いやりやボランティアの心を養うことに繋がり、生活にゆとり・安らぎをもたらす重要なことである。せせこましく日々を繰り返し、積み重ねていく現代人に最も必要とされる要素といえるであろう。

歴史を研究し叙述する身としては、過去の人類の暮らしの変化の中に存在する、こうした失われつつある大切な文化を取り上げ、現在に生きる人々に警鐘を促すことも重要な責務と考える。

戦国期の人々から学び取れる宗教心を、現代人への大切なメッセージとして心に留め、筆を置くことにしたい。

注

1）現在のつくば市・土浦市・新治村の一部とかすみがうら市のほとんどが範囲となる。

2）現在廃寺。

3）寺嶋誠斎「三十五　最勝寺」『土浦史備考　第三巻』三二四頁　一九九四　土浦市教育委員会

4）牛久市「菅谷右馬允」『牛久市史』三三〇頁　二〇〇四

5）註３と同じ

6）宍倉空也堂には、六字称号を唱える空也をを表現した本尊、空也念仏に使用される鉦、「南無阿弥陀仏」をはじめとした数多くの版木などが保存されている。

7）空也堂所蔵文書にみられる。